

略 年 表

略 年 表

収録年代は本編にない原始から1956（昭和31）年
までを対象とした。各事項の日付・典拠は本文参照

時代・西暦・年号		地 域 の よ う す
縄文時代	BC. 4000	釈迦堂遺跡（真鶴）、平台・沢尻遺跡（岩）より土器・石斧・石 鍬・石皿・黒曜石ヤジリなどが出土 謡坂遺跡・上野遺跡（岩） 貴船明神社上遺跡（真鶴）
弥生時代	BC. 200	
古墳時代	AC. 300	
飛鳥時代	646大化2	平台円墳（岩）より須恵器・土師器・直刀・玉類が出土 大浜横穴墳（真鶴） 狐塚1・2号円墳（真鶴）より須恵器・土師器・直刀・玉類が 出土 大化改新／全国に国郡里制がしかれ相武・師長両国造の支配域 を合わせて相模国とし、県土が2国（武蔵の一部と相模）とな り、この地方は相模8郡の1つ「足下郡」となる（ほかに足上 ・余綾・大住・愛甲・高座・鎌倉・御浦） 郡の下に里に替えて郷が置かれ、この地域は「垂水（たるみ）郷」 とされる この地方は朝廷・貴族の封戸とされ海草・魚介類・橘子が貢進 される／相州小松石が岐阜県養老郡時村龍淵寺の墓石に用いら れる 貴宮明神（真鶴・現 貴船神社）創立。祭神は大国主神・事代主 神・少彦名神 兒子明神（岩・現 兒子神社）創立。祭神は55代文徳天皇皇子惟 喬親王とその御子神（『新編相模国風土記稿』） 発心寺（真鶴）中尊の阿弥陀如来像はこのころ制作されたもの という／足下郡は一時西富郡ともいわれた 荒井城址（真鶴）は、源義家に従い後三年の役に武功のあった 荒井実継の館跡と伝える／保元・平治の乱を避け京から下った 土屋格衛が岩村で採石業を創始する／この地方が土肥氏の支配 下にあり相模国早川庄土肥郷と呼ばれる 8月、源義朝の遺子頼朝が配所（韭山）から平氏討伐の兵を挙 げるが、石橋山合戦に敗れ真鶴崎（岩浦）から海路安房国へ逃 れる。この時の船出に協力した功を賞して頼朝が岩村に海山の 自由渡世を許可したと伝える／岩村兒子明神に土肥実平の外孫
奈良時代	715霊亀元 (天平時代) 729～	
平	889寛平元	
安	901延喜 ～ 年間 (平安中期)	
時	(平安末期)	
鎌倉時代	1180治承4	

鎌倉時代	1249	建長 ～ 年間	万寿冠者の霊を祀るとある（『新編相模国風土記稿』） このころ鎌倉の町並みや社寺・墓所の建設用に真鶴近辺産安山岩が使われる
	1374	応安 7	京都五山の僧義堂周信が龍門寺を訪れ滝を見て詩作する
室町	1418	応永25	土肥氏が没落し替わって大森氏がこの地方を支配する
	1457	長禄元	太田道灌による江戸築城用にこの地域の石材が送られる
	1469	文明 ～ 年間	平安末期この地に採石業を創始した土屋格衛の業績をたたえる「石工先祖碑」が専祖畑（岩）に建つ
	1495	明応 4	伊勢宗瑞（北条早雲）が大森氏の拠る小田原城をおとしいれ、以後100年間この地方を北条氏が支配する
	1504	永正元	原行和尚が無宗派無住であった龍門寺を禅寺として開く
	1519	16	北条氏綱が伊豆山権現参詣の帰路真鶴村に来遊する
	1528	享禄元	このころこの地方の村々で漁労が生業化していたとみられる
	1545	天文14	京の連歌師宗牧が東遊の折、鷗窟（しとどのいわや）を来観する
	1555	弘治元	貞巖和尚が浄土宗発心寺（真鶴）を開く
	1564	永禄 7	岩・真鶴の魚介類売買は精銭（指定の良貨）を使えという北条氏印判状が下される
時	1571	元龜 2	石材の産出が盛んになる／北条氏政が岩村の新造鮫追船に諸役免除の印判状を与える／このころから岩・真鶴浦が北条水軍の基地になるという
	1573	天正元	林屋和尚が龍門寺を中興、以後歴住／明岩和尚が曹洞宗常泉寺（真鶴）を開く／長印和尚が浄土宗西念寺（真鶴）を開く
	1581	9	北条氏直が岩村の新造鮫追船に諸役免除の印判状を与える
	1582	10	柚山和尚が自泉院（龍門寺末・真鶴）を開く／北条氏が熨斗鮑をつくるため真鶴の潜り漁士の三崎（三浦）派遣を命じる印判状を下す／このころ真鶴・福浦・岩が土肥郷から分離（真鶴郷）
	1590	18	豊臣秀吉が小田原攻めの途中、真鶴から川奈までの9か郷の治安をはかり掟書を出す／北条氏が小田原城を明け渡し秀吉に降伏し（7月）、大久保忠世が小田原藩主となる／相模国内を旧称（8郡）にもどす（ただし足上・下郡を足柄上・下郡と改称）
	1591	19	領内の検地が行われる（天正検地）
	1592	文禄元	鍋岩和尚が曹洞宗西福寺（真鶴・明治期廃）を開く
	1597	慶長 2	独翁和尚が長昌院（龍門寺末・岩）を開く／喜山和尚が曹洞宗長徳寺（真鶴・明治期廃）を開く
	1603	8	真鶴村五味伊兵衛が江戸城用石を船で江戸へ運ぶ／海運業が盛んになる／加賀藩前田侯の墓所に小松石が使われる
	1606	11	幕府の命令で江戸築城に当たった福岡藩が筑前から小河政良を奉行とする7人の石工を岩村に派遣し「口開け丁場」を開く
江戸時代	1607	12	聖庵和尚が実相院（龍門寺末・岩・明治期廃）を開く
	1611	16	山伏吉本坊が宝性院（真言宗東寺派祈願所・真鶴）を開く／徳川家康がこの地域山中で鷹狩をする（『駿府記』）
	1612	17	大久保氏領の2度目の検地が行われる／龍門寺住職が大雄山最

略 年 表

江 戸 時 代			乗寺報恩院の輪住をつとめるようになる
	1614	慶長19	大久保氏 2 代忠隣が改易され小田原城は幕府所轄の番城となり 阿部氏の入部（1619年）まで諸大名・代官が交替で在城する
	1615	元和元	領内の田畑永代売買が禁止となる
	1619	5	阿部正次が小田原入封
	1620	6	このころから領主の命令で寺社や名主屋敷内で柑橘類が栽植さ れるようになるが百姓には禁じられる
	1623	9	阿部氏が移封され小田原城は稲葉氏の入封（1632年）まで再び 番城となる
	1628	寛永 5	流浪の禅僧風外慧薫が真鶴に天神堂を開き、以後20余年間在住 する／このころまでに岩・真鶴村の寺院が建ちそろう宗門人別 帳がつくられ檀家（寺請）制度が確立する
	1629	6	江戸城最後の大工事ははじまり地域に徳川御三家（尾張・和歌 山・水戸藩）と松平侯所轄の採石場が設けられる／石景気の岩 村は石工専業に変わり地先海面への真鶴方の出漁を黙認、これ が既成事実化し岩村にとり後のちまで障害となる
	1632	9	稲葉正勝が小田原藩主となる／小田原城付領の足柄上・下郡を 東筋・中筋・西筋に分け三筋と呼び、この地方は西筋にあたる
	1635	12	小河正良が主君黒田長政の13回忌に供養塔を西念寺に建てる
	1637	14	紀州（和歌山）田広と次兵衛が年季稼ぎのかたちで真鶴村尻掛 浦に鰯（ぼら）網漁を、また小田原藩直請小肴漁をはじめ
	1640	17	稲葉氏による 領内検地がはじまる（寛永検地）／民営の石切業 が盛んになる／漁獲物・石材などの江戸積み送りが頻繁になり 江戸との往来が地域の習俗に影響をおよぼす
	1641	18	罷屋和尚が如来寺（滝門寺末・岩・明治期廃）を開く／真鶴村 高 111石・家数 165、岩村高64石・家数66（『小田原領西筋村々 高帳』←寛永検地）
	1643	20	泉州（大阪）堺の池田弥三（惣）兵衛が真鶴村宮ノ前を本拠に 早川から伊豆山沖までの鯛長縄漁の運上場を請け負う／水戸藩 主徳川頼房が石丁場の検分がてら来村し真鶴村名主五味氏宅に 休憩する／僧風外が五味家の依頼で「頼房公来駕記」を書く
	1645	正保 2	五味家に寄留する僧蔭山が当主伊右衛門の依頼により鶏窟内に 窟縁起と源頼朝の絵像を刻む／この年に風外も五味家の依頼を うけて「巖屋縁起曰」を書く
	1648	慶安元	小田原藩主稲葉侯が鰯網漁や湊の状況視察に来村し名主五味伊 右衛門宅に宿泊／このころ熱海道真鶴村口に道標が建つ
	1650	3	風外和尚が貴宮明神神主の依頼で「貴宮大明神縁起」を浄書
	1651	4	このころから3年に1度ずつ貴宮明神の神輿船のお供をして湊 内をめぐるようになると伝える（貴船祭りの起こり）
	1654	承応 3	光西寺の五層塔が建つ／（岩村名主権兵衛）
	1656	明暦 2	江戸の湾岸埋立用築石を真鶴から切り出す
	1657	3	江戸大火で損壊した江戸城の普請用石を岩・真鶴から切り出す

江戸時代	1659	万治 2	稲葉氏による万治検地（岩村128戸、真鶴村279戸）
	1660	3	このころ岩村の石工業は最盛期を迎え丁場数50数か所となる
	1661	寛文元	小田原藩が領内村々に松苗15万本を割り当て真鶴岬野に植林し 一帯は以後立ち入り禁止の御留山（お林）となる
	1666	6	江戸公儀御用石垣築石728本、伊豆堅割栗石300坪を岩・真鶴から切り出す
	1669	9	接木仕立の蜜柑や柿などが発心寺畑地内に栽植される
	1672	12	「真鶴村書上帳（明細帳）」ができる（名主五味甚左衛門・清左衛門）／このころには 公事用蜜柑が栽培され、甘味な上ミカン類は御用菓子として献上し下ミカン類は貢納される
	1676	延宝 4	「岩村明細帳」ができる／石工業の不況で丁場数が減少する
	1682	天和 2	仙台から江戸への米輸送請負人に貸した岩村清兵衛の持船が、出がけに鹿島灘で難破し乗組員全員エゾ地（北海道）に漂着
	1686	貞享 3	御朱印高岩村63.5石真鶴村161.4石（「稲葉家御引渡記録」）／3代目田広与次兵衛が小田原藩から、大磯から伊豆山までの鰯網漁の独占漁業権を得る／このころ四艘張網漁の最盛期となる／稲葉氏3代正通が移封され再び大久保氏（忠朝）が藩主となる／荒井村を福浦村と改名
	1691	元禄 4	（岩村名主惣左衛門）
	1692	5	吉浜・鍛冶屋方が岩・真鶴・福浦分内で刈敷（田肥用柴草の刈取）をしたとして紛争になる（刈敷場争論の起り）
	1694	7	荒井坂（真鶴村から福浦村に至る）に道標が建つ
	1695	8	吉浜村が岩沢山に新規石丁場を計画し岩村との紛争になる（石山争論の起り）
	1703	16	大地震（元禄地震）の被害が出る
	1706	宝永 3	池田弥三兵衛が真鶴村漁の肴役を請負う
	1707	4	相模・東海地方大地震（宝永地震）に続く富士山の噴火
	1715	正徳 5	領主からの築石課役に対し、近隣6か村が石渡世困窮につき経費の前借を願い出る／（岩村名主喜右衛門、真鶴村名主平兵衛・半左衛門）／これまで石工専業だった 岩村が不景気のため領主に漁業渡世を願い出るが真鶴方の反対にあう
	1725	享保10	伊豆宇佐美村が江戸石問屋と組んではじめた石切商売が「石方六ヶ村（根府川・岩・真鶴・福浦・吉浜・門川）」の営業妨害になるとして石丁場差し止めを願い出る
	1728	13	將軍家御用の熱海湯樽を真鶴村五味清左衛門が押送船で江戸へ運ぶ／このころ瀧門寺満立和尚が寺子屋を開く
	1734	19	（真鶴村名主五味甚左衛門・清左衛門）
	1739	元文 4	岩村船数10艘のうち天当船3艘は「潜蛟追船につき船役免除」とある（北条氏時代からの旧慣か＝「卯年岩村船役金之事」）
	1742	寛保 2	岩村が石景気のため石工専業にもどる
	1746	延享 3	決着済みの岩沢山石丁場をめぐる岩・吉浜両村間に再び紛争が起るが3年後に岩村が勝訴／（岩村名主惣左衛門）

略 年 表

江 戸 時 代	1749	寛延 2	岩村惣百姓 1 軒につき間口 3 間の採石場 1 か所を村内に開設できる権利を村民集議により確認する（百姓丁場）
	1754	宝暦 4	江戸・小田原の商人が田広与次兵衛経営の鰯網漁の権利乗っ取りを図り不成功におわるが、このころから漁業経営への商業資本進出のきざしが現れる／（真鶴村名主半左衛門・平左衛門）
	1769	明和 6	大時化（しけ）で真鶴湊内や漁小屋、民家に被害（10月）
	1773	安永 2	長坂（熱海道岩村口）に道標が建つ
	1776	5	このころ村高が真鶴278.7石、岩村146.1石（以後変動なし）
	1782	天明 2	大地震で倒壊した小田原城再建用石を切り出す／天明飢饉
	1785	5	田広与次兵衛の鰯網漁が江戸城や紀州藩江戸屋敷御用達となる
	1793	寛政 5	「真鶴村絵図」がつくられる
	1794	6	池田与七郎請負の鯛長縄漁不振のため真鶴村が運上場を管理
	1800	12	地元漁は釣・四ツ手網・刺網・手繰網・四艘張網が主体となる
	1809	文化 6	真鶴村が不漁続きで困窮し小前惣連印で小田原藩からの救米代金50両の立替えを名主（清左衛門・伊右衛門）に嘆願
	1810	7	この地方も追々小田原宿加助郷高がかさみその負担に苦しむ
	1822	文政 5	「岩村図」（絵地図）に住家127棟がみえる
	1824	7	真鶴村名主五味台右衛門が古網漁場に根柢網を張り立て、以後大漁で活況が続く
	1827	10	真鶴・福浦村境沖の操業権について両村が争う／このころ早川以南は「片浦筋組合八ヶ村（早川・石橋・米神・根府川・江之浦・岩・真鶴・福浦）」と「土肥筋組合六ヶ村（吉浜・鍛冶屋・宮下・門川・堀ノ内・宮上）」となる／（岩村名主伊蔵）
	1831	天保 2	岩村官石工棟梁三津木徳兵衛父子の業績をたたえる頌徳碑が瀧門寺門前に建つ／このころ長昌院禅宝和尚が読み書きを教える
	1832	3	星ヶ山の石丁場をめぐり岩・江ノ浦両村間に入会争論が起こる
	1834	5	真鶴村大火で焼失130戸／天保飢饉はじまる
	1836	7	真鶴村が不漁と飢饉による穀物高値のため困窮、黒崎鰯漁場の5年間買い切りの条件で田広与次兵衛から金300両を借入れる
代	1838	9	大飢饉の影響で死者数が最多となる
	1843	14	米神村地先海面での入込漁について真鶴・米神両村が争う
	1844	弘化元	岩村が寛保以降の石景気が不振となり漁業への転向を藩に願い出るが、真鶴方の反対があり5年間の預かりとなる
	1845	2	増上寺広大院（11代將軍家齊室）宝塔普請用石を岩・吉浜村から切り出す／瀧門寺に和算師匠中島花山の筆子塚が建つ
	1847	4	真鶴村大火（8月）で焼失232棟
	1848	嘉永元	岩村が再度領主に漁業への転向を願い出るが不調におわる
	1849	2	真鶴村が続く不漁と穀物高値のため困窮し田広与次兵衛から金160両を借入／（岩村組頭朝倉半三郎）
	1850	3	このころ幕府の海防政策から真鶴岬先端に台場（砲台）が築かれる／江戸城西丸修築用石を岩村から切り出す
	1851	4	岩村高146.1石・家数 128軒・人数 574人（男265 女309）・船数

			7、真鶴村高 278.7 石・家数 279 軒・人数 1,402 人（男737 女665）・船数75（『大久保氏高帳』）
	1852	嘉永 5	「切支丹宗門御改御帳」（岩村）
江	1853	6	大地震が頻発し被害（嘉永地震）／品川台場の用石が切り出される／外国船来航に対し小田原藩は、真鶴近辺に番士を配備
	1855	安政 2	小田原城普請用石を切り出す／（岩村名主朝倉元次郎）
	1856	3	幕府用船昇平丸が荒天を避け真鶴浦に 1 週間停泊／増上寺心観院（10代将軍家治室）宝塔普請用石を切り出す
戸	1857	4	岩村が、石橋村など 4 か村と共同で江ノ浦沖の根柢網張り立てを藩に願い出て成功する
	1858	5	真鶴村が新網漁場に根柢網を張り立てる
	1859	6	江戸城や横浜築港用石を石方六ヶ村から切り出す
時	1860	万延元	早川・米神村の新規石丁場開設の動きに対し岩村などが既得権を主張して拒否するが、小田原藩の介入で容認を余儀なくされる（石方六ヶ村の権益の後退）
	1861	文久元	真鶴村が沖網漁場に根柢網を張り立てる
代	1863	3	真鶴村火事で焼失80軒余
	1864	元治元	再び真鶴村火事で焼失70軒余／如来寺で読み書きを教授する
	1866	慶応 2	増上寺昭徳院（14代将軍家茂）宝塔普請用石を切り出す／真鶴湊在籍船による石船組合を結成
	1867	3	公儀石御用が停止となり岩村民が領主に漁業許可を願い出る
	1868	明治元	幕軍方遊撃隊士が真鶴に上陸し箱根・小田原方面で官軍と戦う（箱根戊辰戦争）／東海道筋の往来・輸送激増のため公用伝馬賃が急騰し、村々がその抛出に苦しむ／岩村が生活危機を訴えるため非常手段として懲罰覚悟で名主を通さずに政府へ直訴
明	1869	2	岩村民の直訴が奏功し岩村漁業鑑札が認可される／池田与七郎の鯛長縄漁既得権出願が不調におわる
	1871	4	最後の岩村名主半田庄右衛門と真鶴村名主熊本太兵衛が各村の戸長になる／真鶴湊石船組合を船頭組合と改称／品川・横浜間鉄道敷設工事に真鶴地方の石材が使われる／海辺漁師の壮健者を対象に海軍水卒徴募検査
治	1872	5	沖合漁業自由化後も岩村地先海面の占有権を主張する真鶴・福浦村側を岩村が追訴／真鶴村戸籍ができる（286戸1,512人）
	1873	6	真鶴・岩両村連合の小学「立成舎」設置／足柄泉管轄の「石山会社」設立（近代石材業の発足）／陸軍歩兵志願者の徴募通達
	1874	7	吉浜郵便局が開局、周辺 9 か村の集配業務を扱う
代	1875	8	田広甚七郎が、政府へ鰯網漁業再興を申請するが不調におわる（寛永以来の尻掛鰯網漁の終焉）／立成舎を真鶴学校と改称
	1876	9	小田原―真鶴―熱海間に蒸気船が就航
	1877	10	岩村戸籍簿に130戸580人とある／大風波で船・民家に被害
	1879	12	（戸長：真鶴村鈴木啓之助、岩村山本五九平、福浦村門田良甫）
	1881	14	県道熱海線（小田原―熱海）開通、路線に人力車が運行

略 年 表

明治	1882	15	岩村如来寺に真鶴学校分校／岩村松本茂が温州蜜柑の経営栽培
	1884	17	真鶴・岩・福浦3村が連合し真鶴村に戸長役場を置く
	1886	19	真鶴村漁夫組合結成／真鶴学校を真鶴小学校と改称
	1887	20	石材業が近代地場産業として活性化する（東京帝国大学建設に新小松石材が使われる）／温州蜜柑栽培の産地化が定着する
	1889	22	郡市町村会が設けられ議員が選出される／真鶴村外2ヶ村（岩・福浦）組合役場を置く（初代組合長門田良甫）
	1890	23	如来寺内の真鶴小学校岩分校が岩尋常小学校として独立
	1893	26	真鶴港開港式挙行（7/26）
	1894	27	真鶴小学校に高等科を併設、岩・福浦村生徒も収容／岩村大火／（組合長橋原正徳）
	1895	28	再び岩村火事／船頭組合を真鶴港石材運搬船船長組合と改称
	1896	29	小田原―熱海間に 人車鉄道〔豆相人車鉄道KK〕が開通／（組合長岡田寅吉）
	1897	30	岩尋常小学校新築校舎（2教室）が長昌院境内に建つ
時	1898	31	真鶴尋常高等小学校校舎を現在地に新築
	1902	35	真鶴郵便局が開局／漁業法制定により定置・専業漁業権を設定
	1903	36	漁業組合結成（岩・真鶴）
	1904	37	東京・横浜の市街電車路面敷石材を岩村土屋大次郎が請負う／（組合長熊本太兵衛）
大	1905	38	岩村松本茂が蜜柑貯蔵庫を開発／漁場賃借問題で岩村内に紛糾
	1906	39	小田原―熱海間に軽便鉄道（熱海軌道KK）が開通
	1907	40	東京伊東間汽船の寄港地となる／漁夫組合を実業者組合と改称
	1908	41	真鶴郵便局で電信業務開始／（組合長高橋好造）
	1909	42	岩村土屋大次郎が衆議院議員に当選／村内に電灯がともる
	1910	43	真鶴村青木寿郎が根拵網にかわる大敷網を導入し漁獲量が激増
	1911	44	岩海岸に陸軍採石場を開設／青木忠蔵の岩大根沖鰹定置網設置にからむ紛争の巻き添えて如来寺が焼失、以後廃寺となる
	1912	大正元	真鶴村でコレラ病／（組合長青木喜平）
大	1913	2	胎中楠右衛門の提唱で西相地域に「相州蜜柑同業組合」を設立
	1915	4	真鶴日掛組合所有の沖網経営権を小田原魚市場に貸与（以後昭和25年まで地元以外の個人もしくは法人に経営をゆだねる）／（組合長職務管掌西尾盡吉）
	1916	5	相次ぐ真鶴村漁業紛争収拾のため沖網漁場所有権を日掛組合から村有に移す／真鶴村で再びコレラ病、3か村共同で隔離病舎を設置／（組合長代理奥津乙次郎→組合長今井広之助）
時	1917	6	真鶴村池村田之助が動力機関付木造大型船の建造に成功
	1918	7	真鶴村大火で村戸数470内焼失251／岩村大火で焼失27戸
	1919	8	青木寿郎が鰹大敷網に替えて大謀網を導入、漁獲がさらに増す／（組合長岡田寅吉・再任）
	1920	9	東京湾岸の軍事施設・河川・ドック工事に真鶴石の需要が高まる／第1回国勢調査（真鶴698世帯3,199人、岩298世帯1,516

大 正 時 代	1921	大正10	人)／(組合長山本五九平) 真鶴村に またまたコレラ病／真鶴郵便局で 電話業務開始／(組 長職務管掌神野作十郎→組合長露木真作)
	1922	11	官鉄熱海線が真鶴まで開通、真鶴駅一湯河原温泉場間に乗合馬 車・小型自動車が行／この地方にはじめて海女の稼働が見ら れるようになる(志摩地方から入植)／(組合長藤沢清盈→組合 長代理竹内驂作)
	1923	12	9月1日関東大地震に大津波が重なり郡下最大の被害が出る／ (組合長草柳由太郎)
	1924	13	岩小学校が現在地に建つ
	1925	14	鉄道熱海線が熱海まで開通／県道真鶴停車場線(駅一海岸)が できる／第2回国勢調査(真鶴796世帯3634人、岩290世帯1421 人)／(組合長代理朝倉常吉)
	1926	昭和元	県道岩村停車場線(駅一海岸)ができる／真鶴村青年訓練所設 置／(組合長職務管掌橋川保→組合長松本赴)
	1926	2	真鶴村が真鶴町となる(9/28)／1町2ヶ村組合 役場新庁舎、 真鶴尋常高等小学校新校舎が落成／町内に神静女学院が開校／ 石材運搬船舶長組合が船長親睦会に改まる／多摩御陵・宮内省 図書寮・早稲田大学大隈講堂建設用石として小松石が切り出さ れる／本格的真鶴港造成工事がはじまる
	1928	3	東京八重洲ビル建設用石が切り出される／製氷工場が真鶴港内 に建つ／熱海線全線(東京一熱海)が電化・複線化
	1929	4	真鶴町営上水道(磯崎水源)完成
	1930	5	第3回国勢調査(真鶴町879世帯4,084人、岩村293世帯1,427人) 豆相地震で道路被害(11/26)／岩尋常小学校に高等科併設
昭 和 時 代	1931	6	風外道人の旧跡(磯崎天神堂)が判明
	1932	7	大暴風雨により果樹が全滅に近い被害／町税の慢性的滞納解消 策として納税組合を設立、日掛・月掛金徴収を区ごとに実施
	1933	8	東西地区青年会を統合／鷗窟の県史跡指定申請が不認可となる
	1934	9	4月真鶴港が完成、町立魚市場が開業／岩村内に腸チフス病／ 12月丹那トンネル開通、関西向け近海水産物を真鶴港に陸揚げ し鉄道輸送するようになる
	1935	10	沖網・岩江漁場で大謀網にかえて落網を導入、漁獲が大幅増／ このころ真鶴町平井重太郎がはじめて漁船に動力機関を取付け たという／町立青年訓練所が青年学校となる／真鶴・福浦に腸 チフス病／第4回国勢調査(真鶴町955世帯4,434人、岩村374 世帯1,898人)／(組合長西尾盡吉)
	1937	12	岩小学校が全焼／日中戦争起こる／(組合長青木市三郎)
	1938	13	真鶴海岸に海軍丁場(採石場)ができる
	1939	14	(組合長代理鈴木辰五郎→組合長露木茂)
	1940	15	真鶴港石材運搬船舶長会・機関士会・海員会が賃上げスト／こ のころから戦時色が強まり石材運搬船長親睦会が解散、真鶴海

略 年 表

		運産業報国会結成／食料・日用品類が配給制になる／隣組制度がつくられる／第5回国勢調査（真鶴町935世帯4,615人、岩村308世帯1,554人）
	1941 昭和16	大雨により被害（7月）／太平洋戦争が起こり（12/8）、軍需用石が盛んに切り出される／小学校が国民学校に変わる
	1942 17	このころ史跡「鷗窟」およびその周辺の岩壁が取り崩され、追浜飛行場の工事用石に使われる（採石反对者に軍部から圧力）
	1943 18	岩村郵便局が開局
	1944 19	岩・真鶴小学校が疎開児童を受け入れる／真鶴町漁業組合を魚業会と改称／（組合長代理柳井忠治→組合長高橋仙太郎）
	1945 20	町内が米軍機の空襲により被災／本土侵攻にそなえて真鶴・岩地区の学校や寺院に陸海軍兵士が駐屯し、町内地域に防御陣地が築かれる／学校は2部授業となり小学校高等科男子が駐屯部隊に配属され作業に従事／太平洋戦争終結（8/15）、日本は敗戦国となり国内諸制度が民主化される／日中戦争（1937）→太平洋戦争における岩村・真鶴町内戦死者数計203人
戦	1946 21	真鶴町外2ヶ村組合を解散し真鶴町・岩村・福浦村が独立して行政事務を行うようになる／明治以来の実業者組合が改良網組合に改まる／（真鶴町長青木市三郎、岩村長土屋康二）
後	1947 22	新学制により国民学校は小学校となり青年学校は廃止され、真鶴町岩村中学校組合が発足し組合立真鶴中学校が開校／改良網組合を相模湾漁業組合と改称／（真鶴町長 御守国平、岩村長 二見毅一郎）
・	1948 23	岩村農業協同組合設立／真鶴町営診療所開設／真鶴町警察署設置／（真鶴町長松本昶→橋本徳治）
新	1949 24	キティ台風で港湾に大被害／真鶴町広報創刊／町公民館開館
町	1950 25	相模湾漁業経営組合を吸収合併して真鶴町漁業協同組合設立／石材法施行、業者の採石権が創設される／漁業権関係法律の実施により町有の漁業権が地元漁業従事者の手に移る／このころ米軍基地や県内外の土木工事に真鶴石が使われる／町章制定
誕		／第7回国勢調査（真鶴町1355世帯6,462人、岩村426世帯2195人）
生	1951 26	真鶴町警察署を廃止／岩・真鶴・福浦3か町村共営火葬場が建つ／（岩村長山本真一）
ま	1952 27	真鶴岬の国有林払下げが実現／町域の温泉試掘事業が不成功／真鶴有料道路（小田原―湯河原間12Km）着工（昭和34年完成）
で	1954 29	真鶴港・岩港のキティ台風被害修復工事完了／真鶴半島地域が県立自然公園に指定される／岩江漁場で鯛の大漁（2万7,000尾）／（岩村長鈴木鶴太郎）
	1955 30	第8回国勢調査（真鶴町世帯1,403人口6,702、岩村世帯460人口2,258）
	1956 31	10月1日真鶴町と岩村が合併し新真鶴町となる（人口9,049人、

		面積6.98km ²)／初代町長橋本徳治・助役朝倉富士雄／真鶴半島 観光開発に初の民間資本（江ノ島興行）を導入／沖網が真鶴漁 協の完全自営となる／組合立真鶴中学校を真鶴町立真鶴中学校 と改称／このころを境に相模湾定置（鰯）網漁業が衰退しはじ める
--	--	---

町史編さん関係者（平成7年1月現在）

町史編さん委員会

委員長	青木 潔（助 役）
副委員長	遠藤 勢津夫（教 育 長）
委 員	藤田 和雄（専 門 員）
同	川崎 勝（同 員）
同	牧岡 靖治（学識経験者）
同	向山 堅弥（同 員）
同	川口 仁斉（同 員）
同	中路 脩平（同 員）
同	平井 敏正（同 員）

町史編集委員会

委員長	藤田 和雄
副委員長	川崎 勝
委 員	馬場 弘臣
同	椿田 卓士
同	土井 浩
同	池上 裕子
同	湯川 悦夫
同	川口 仁斉
同	中路 脩平
同	平井 敏正

執筆委員

湯川悦夫（神奈川県立大井高等学校教諭）

池上裕子（成蹊大学助教授）

馬場弘臣（日本児童教育専門学校非常勤講師）

椿田卓士（日本近世史研究者）

土井浩（平塚市博物館学芸係長）

川崎勝（日本近代史研究者）

藤田和雄（神奈川県立城北高等学校教諭）

資料調査員

櫻井光夫（岩地区）

川ノ邊昭治（真鶴地区）

事務局

総務担当参事

企画調整課長

課長補佐

主任主事

嘱託員

前総務担当参事

前企画調整課長

前主任主事

青木和男

平井敬一

青木健

菅野文人

湯本満

青木啓

松本吉之助

原信行

あとがき

本書『真鶴町史 通史編』は、町域の先史時代から現代（昭和三十一年＝一九五六、新町制施行）に至るまでの歴史の過程を通観したもので、旧来進められてきた真鶴町文化財審議委員会の調査活動、真鶴町郷土を知る会の研究集成及び既刊『真鶴町史 資料編』の編集作業等の成果を基礎にして叙述されています。

真鶴町においては、今日に至るまで町史全般にふれる著作といったものがありませんでした。したがって本書は、町域の歴史を総括的に叙述した最初の史書であって、町民ならびに本町の歴史に関心ある方々の長年の要望にこたえる画期的な刊行書であるといえましょう。

ふり返りますと、町史編さんの構想は昭和四十五年「真鶴町文化財保護条例」制定に端を発しています。これに基づき設置された文化財審議委員会により町重要文化財指定作業が進められ、昭和五十五年の第十次指定をもって一応のめどがつけられました。続いて策定された「真鶴町総合計画（昭和五五～六四年度）」の中に、町史編さん事業が位置づけられ、その具体的発足を見たのが昭和六十二年（一九八七）でした。

以来、町史資料目録五巻、資料編・通史編各一巻の刊行をもって事業はここに終了しました。そして当初の七か年計画が、総括専門員内田哲夫先生の途中急逝という不慮の事態により一年の延引を見たものの、そのほかは事業全般を通じほぼ予定通りに運びました。これはひとえに関係者の方々のご尽力のおかげです。

当町は、旧岩村・真鶴町（村）二地域の歴史を受け継いで昭和三十一年（一九五六）合併し、新真鶴町として現在に至っていますが、冒頭申しましたように、今次事業においては原始・古代から町村合併期までを目途に町史編さんを図りました。したがって、新町制発足後四十年を経過しほどなく半世紀を迎えようとしている今日、その間の歩みを補完すべき時機に来ているのは確かで、今次事業が一段落した時点において、事務局としましても既に次段階へ向

けての展望ないし計画案を持つべきものと考えています。

ところで、当町始まって以来の出版文化事業ともいへば町史編さん事業は、平成七年三月をもって終了しましたが、本事業の中で確認された資料は、後にふれる事情等からして皆様の期待に十分こたえられるだけの分量とはいいたいかも知れません。しかも「資料編」に収載されたものは、またそのうちのほんのわずかにすぎません。そこで大切なのは、事業終了後においても、これまで確認収集された資料と、今後追加されるであろうものも含めて整理保管し、町民ならびに内外の研究者に公開し、その利便に供する仕事が残されているということです。

ここで一言、事務局として感想を述べさせていただくならば、今次の編さん業務に当たりながら、身にしみて無念さを感じさせられたことがあります。それは、地域の地形と古来の集落形態が岩・真鶴ともに災害に対し極めて脆弱であったということです。近世以降に限っても、史上大書されるような地震・津波・火災にこの地がしばしば見舞われていますが、湾入した海岸線へ向けすり鉢をなしてひしめき合った集落が、海山からの風水害や火災のあおりを増幅するといった宿命的ともいへべき悪条件下に置かれていました。そうした中であつた寺社・旧家からは、度重なる災害により古資料の多くを流・焼失したという伝聞が、編さん関係者をいたく落胆させたものです。また近くは大正の大震災で、町（村）役場の所蔵資料・重要書類の多くが灰と化したことなども、惜しまれてなりません。

そうした悪条件を克服して今日まで保存されてきた希少な古資料を開示あるいは提供してくださった所蔵者の方々、乏しい資料の調査収集ならびに編集執筆に当たられた方々、そして資料編・通史編の印刷を一貫して引き受けていただいた出版社のご苦勞に対し、ここに厚くお礼申し上げます。

平成七年九月

真鶴町史 通史編

平成七年九月三十日発行

発行 真鶴町

〒259-02 神奈川県足柄下郡真鶴町岩二四四番地の一
電話 〇四六五(六八)一一三一(代表)

印刷 第一法規出版株式会社

〒107 東京都港区南青山二丁目一 番一七号
電話 〇三(三四〇四)三五一(代表)